これからの教員養成のあり方について

東京学芸大学教育学部2年　髙橋鈴

自己紹介

たかはし　　すず

髙橋　鈴

東京学芸大学 教育学部 初等教育専攻 学校教育プログラム2年
Tokyo Education Show(TES)2024 学生代表

長野県出身。大学1年生の際にTES2023に学生メンバーとして関わり、今年度のTES2024では学生代表として学生メンバーと企画運営を行いつつ、当日は「教育サミット」に登壇しこれからの教員養成に関連した取り組みを紹介。

TES2024の開催概要

日時	10月12日（土）▶13日（日）
形式	リアル・オンラインのハイブリッド開催
会場	東京学芸大学小金井キャンパス
参加者層	児童生徒及び保護者　教育に興味のある学生 教員・教育委員会関係者　教育行政関係者

実施企画

① あたらしい公開研究会

～こんな授業ありなんだ！こんな先生ありなんだ！～

全国の選りすぐりの教員・教育クリエイターが公開研究会を行う。300人規模の超大規模授業から通常学級規模での先導的授業を教員・教育委員会のみならず、学生や保護者なども参加可能な公開講座として実施し、選りすぐりの教育者の魅力を多くの人へ届ける

② 教育サミット

～未来の学校の創り方～

教育業界のステークホルダーを一同に集め教育施策について実現可能なプランを実践事例を元にトークセッションを行う

③ 教育若者会議

～教育の未来を私たちが～

教育に関心のある若者を集め、教育を変えていくための若者主体の協議会「教育若者会議（Youth council）」を行う

④ エドチャレSHOWCASE

～教育の挑戦の見本市～

教育にたのしくかっこよく取り組むエドチャレパートナーの方々がワークショップ、トークセッション、展示など様々な形で自分たちの挑戦を発表する新企画。エドチャレを応援するコミュニティパートナーの方々の支援によって開催が可能になっている。

学芸大生から見た大学のカリキュラム

教育実習前の学生

今の授業では自分が教員になっているイメージが持てない。
大学に入学してから教育基礎科目（教育の基礎的理解に関する科目）等が多いうえに、実践についてリアルに学べる機会が少ない。

卒業前の学生

教育実習へ行くまで学級や子どもへのイメージを持てていなかった。
専門教科に関する勉強が忙しく、教育に関した勉強を思うようにできなかった。

学部1,2年生の頃から
リアルな実践に関わる機会を増やしたい

TESに関わった学生の声

・教員の具体や教育界の最先端を知れたことで、今の大学のカリキュラムに不安を覚えた。
　　◎ICTを活用した学び方について、教員は授業をどのように設計しているのか等を本当に大学で学ぶことができているのか。

・様々な教員の想いや教員以外の教育へのかかわり方も知れて、自分らしい教師像や教育へのかかわり方について悩むようになった。

どう学べばいいのかが分からない、
悩みや思いを共有する場がない

これからの教員養成のあり方

①早期からの濃密な実践機会の充実

実践に触れる機会が多いからこそ学生も自分がどのような教員になりたいのか、どのように教育に関わりたいのか、そのためには何をすればいいのかを考えるようになれる。特に日本の教育の中心である学校現場に行く機会を増やすことは重要ではないだろうか。また、これを実践するにあたっては理論と実践のバランスのとれたカリキュラムを設計する必要がある。

具体例

- 複数回にわたる学校見学
- 現役教員と指導案を作成する経験
- 現役教員や子どもの姿をよく理解している元教員が講義を行う
- 様々な学校種の教員との交流

これからの教員養成のあり方

②主体的に学ぶ学生へのフォロー体制

学生が自分だけの力で主体的に学び、自身の教育へのかかわり方を考えることは難しく、大学の助けが必要。学芸大における教育創生科目のような、教育の様々なトピックを広く浅く学べる環境の整備や、深く学びたいと思った時に大学外へ学びに行ける仕組みやその仲介役の整備が必要。

具体例

- 教育の様々な話題について学べる授業群
- 教育系企業や非営利団体へのインターン等の紹介
- 相談場所の整備
- 学生同士の広い交流